令和３年度教頭専門部会研修会報告書

教頭専門部会

１　日時等　　令和３年 11 月 24 日（水）　14:00～16:00

２　テーマ　　「教頭職として、教員の働き方改革を考える」

３　会　場　　ＪＲ静岡駅ビル「パルシェ」７階第１・２会議室

４　参加者　　全 36 人参加（県内小中高の副校長・教頭・事務職員）

５　日程等　　13:30～14:00　受付
14:00～14:05　開会・専門部会長挨拶及び講師紹介
浜松日体中学校・高等学校　杉本　芳和　校長
14:05～16:05　講演「働き方改革」
帝京大学院教職研究科教職実践専攻　町支　大祐　講師
16:05～　　質疑応答・まとめ
16:30　　閉会
＊司会進行　浜松日体中学校・高等学校　渡邊　健　副校長

６　講演会・研修の主な内容

自らの教職経験や横浜市教委とのモデル校共同研究実践、教員への継続的な意識調査など教育現場に主眼を置いた研究から、具体的なデータと知見、現実的な課題等を提示しつつの講演内容であった。随時、グループディスカッションを入れながらの２時間で活動的な講演会となった。

教育現場におけるこの問題は、現実的にはなかなか難しい課題が多く存在しており、各校とも管理職として対応に苦慮しているなかで、その必要性を改めて考える好機となった。

（１）「働き方改革へのもやもや」①
〇残業カットに「罪悪感・ためらい」を感じている教員
「働き方改革へのもやもや」②
〇例えば、〇〇行事を「縮小 vs　集団作りの根幹」の対立
「働き方改革へのもやもや」③
〇仕事は減らず、帰れ帰ればかり言われる不満の教員
「働き方改革へのもやもや」④
〇そもそも「業務削減は無理だ」と感じている教員

（２）「それでも行う働き方改革」①

〇未来の教育の危機➡求められる実践の変化と多様化（高大接続改革、ICT 活用、主体的対話的深い学び、探究）➡「教員の学び」の必要性

➡「教員の学びの時間を生み出さなければ持続不可能」

「それでも行う働き方改革」②

〇心身の危機、病気休養者、精神疾患の増加➡年々伸びる労働時間➡持続可能性の低下

「それでも行う働き方改革」③

〇人材獲得の危機、「やりがいはあっても勧められない仕事」化➡若い世代の敏感な反応

（３）「改革推進のヒント」

〇働き方そのものへのアプローチ（外科手術）

・キャップ系（時間等への強制的な蓋）・カット（業務の精選）・効率化系（業務の効率化）

〇働き方の「意識や文化」へのアプローチ（漢方治療）

・理想の共有（ｅｘ「理想の１日」を語り、イメージする）

・ポジティブな同調（ｅｘ「みんなでやってる」感の創出）

・改革への「自信」を高める（ｅｘ「やればできるもんだね」の成果）

〇「何」をするか、「どのように」するか

・自己決定が苦手な学校組織（バラバラの意見の中で、決めて・実行が苦手＝否定的人間・総論賛成だが各論で決められない＝だから、「管理職が決めて」「学校として（管理職が）決めて」はダメ

➡サーベイフィードバック（調査と見える化からのアプローチ）

＊①コアチームづくり②データで見える化③ワークショップで「対話」④実践あるのみ

（４）まとめ

提言１　「職場全体を巻き込み、教職員全員で改善策を決めて取り組む」

提言２　「改善策はコピペできない。自校の状況に合わせた対策にする」

まとめ　「外科手術＋漢方治療」「What＋How」が大切

まとめ：相川学園静清高等学校　副校長　小関　直樹